

天草今富地区における暮らしに根ざした空間認識に関する研究

熊本大学工学部 学生会員 ○芥慎太郎
熊本大学大学院 学生会員 原嶋香菜子

熊本大学政創研 正会員 田中尚人
熊本大学大学院 学生会員 岩切謙介

1. はじめに

今富地区は重要文化的景観「天草崎津の漁村景観」の2次申出を予定されている地域である。農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究では「文化的景観」の保護の在り方として『普段から慣れ親しんだ身の回りにある伝統的産業及び生活に関連する景観の中に、その地域の歴史及び文化を見出し、美しさ及び新たな価値を発見することは極めて文化的な行為であり、このような行為を文化財保護の観点から捉え直すことが重要である。』と記述されている。

本研究では、文化的景観の調査手法に基づき、天草今富地区の歴史、自然環境、生活・生業の変遷を調査した。さらに歴史、自然環境、生活・生業に根ざした地域住民の方々の空間認識について分析することで今富地区の景観構造を把握することを目的とする。

2. 今富地区の集落形成プロセスの整理

本章では今富地区の概要を示し、対象地の土地造成手法である干拓、埋め立ての変遷を整理することで集落形成の過程を示す。

(1) 今富地区の概要

今富地区は熊本県天草下島の南西部、羊角湾に位置する農村である。かくれキリシタンの里であり、遺物や史跡、明治期に教会によって運営された孤児院跡などが残っている。今富地区に関する歴史年表を以下に示す（表1）。

(2) 周辺地域との関係

1) 崎津地区との関係

今富地区の南に位置する崎津地区には「メゴイナイ」と呼ばれる漁師の婦人が今富に魚類販売、米や野菜との物々交換のために回っていた。このように今富と崎津との間では交易による関係性が強かったようである。

2) 大江地区との関係

今富の北西に位置する大江には1933年にガルニエ神父によって建立された大江教会がある。明治時代以降、今富地区に教会が建てられ、ガルニエ神父が今富教会

と大江教会を行き来するために崎津、今富、大江をつなぐ神父道を利用していたようである。

表1 今富地区の歴史年

西暦	事柄
1800年以前	アルメイダ神父により崎津教会が設置される[1569 永禄12] 禁教令の発布[1614 慶長19] 天草・島原の乱[1637 寛永14]
1800年代	天草崩れ[1805 文化2] キリシタン禁令の高札撤去[1865 慶応1]
1930	崎津教会改築[1934 昭和9]
1950	旧一町田、富津、新合村が合併。 河浦町として発足。[1954 昭和29] 今富新区画整理事業が完了(20.5ha)[1957 昭和32]
1960	第1次農業構造改善事業着手[1962 昭和37] 天草五橋架橋着手[1962 昭和37] 河浦中学校校舎完成[1962 昭和37] 今富炭坑閉山(出炭量3,162t、従業員135人)[1965 昭和40] 天草五橋開通、総事業費32億円[1966 昭和41] 富津小学校校舎完成[1966 昭和41] 羊角湾開発事業着手[1968 昭和43] 町道舗装着手[1968 昭和43] 町道改良着手[1969 昭和44]
1970	第2次農業構造改善事業園場整備を中心に着手[1974 昭和49] 小規模園場整備事業着手[1976 昭和51] 富津中学校校舎完成[1977 昭和52]
1980	新農業構造改善事業着手[1982 昭和57]
1990	過疎地域活性化特別措置法施行[1990 平成2] 富津公民館新築移転[1991 平成3] 崎津トンネル、崎津大橋供用開始[1994 平成6]

(3) 干拓・埋立

今富地区には江戸時代からの干拓によって、海を陸地化してきた歴史がある。大川内の字名に中瀬貝と残っており、現在の海岸線から約1km北まで海であったようである。1947（昭和22）年以降には現在、富津小学校、旧富津中学校が位置する大字崎津字新月ヶ浦、大字崎津字中ノ迫の埋立が行われた。1957（昭和32）年までには区画整理事業も含め、今富新田として広大な面積の水田が整備された。

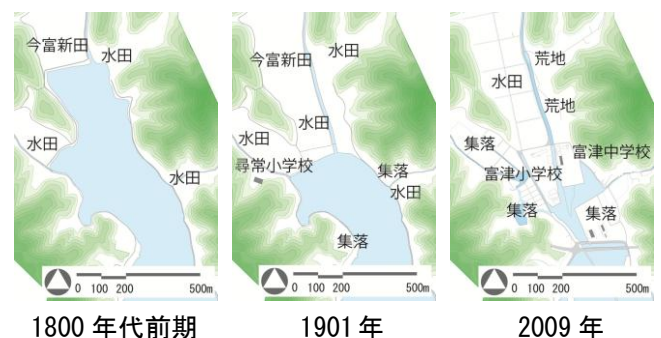


図1 崎津湾の干拓・埋立変遷図

以上のように今富地区はかくれキリシタンの歴史や史跡を有し、急傾斜地のため干拓・埋立によって農地や宅地の拡大を行ってきた土地である。

3. 農業を基盤とした生活環境の構造

本章では今富地区の生業である農業に関して各集落の特徴を整理し、農地利用や農業水利など土地利用の状況を把握し、生活環境の構造を明示する。

(1) 各地区の概要

2011 年 5 月に土地利用の調査を行った結果を図 2 に示す。今富地区は西川内、志茂、大川内、小島の 4 集落で構成されるが、本研究ではひとつの入り江から広がる集落に限定し、対象地域を西川内、志茂、大川内の 3 集落とする。

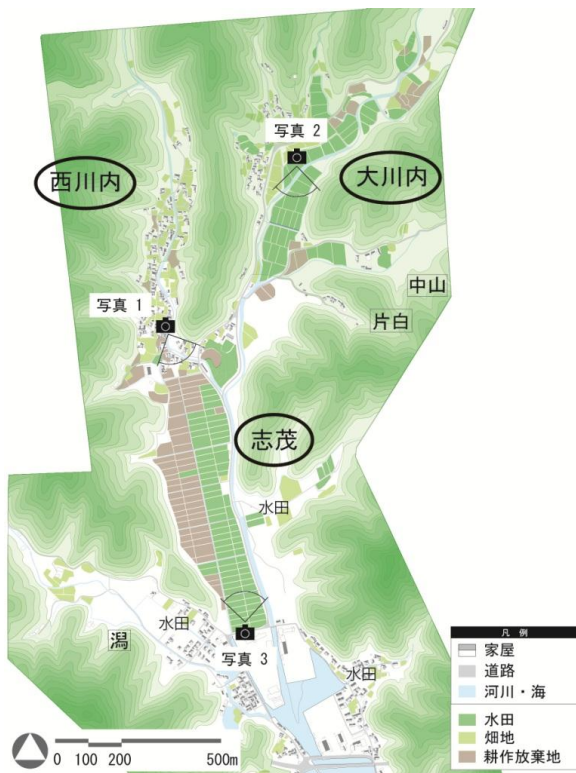


図 2 今富地区現土地利用図

1) 西川内：集落の中央を西川内川が流れる。畑作が中心でイモ類や野菜を栽培している。西川内川は雨が少ない場合に干あがる地点、川の下に浸み込みまた湧き出す地点がある。



写真 1 西川内川

2) 大川内：集落の中央を大川内川が流れる。田畑が混在し、一部複雑な水利システムも存在する。枝郷である中山、片白、大山も大川内に含まれるため範囲は 3 集落の中で最も大きい。



写真 2 田畑が混在する大川内集落の風景

3) 志茂：西川内川と大川内川が合流した今富川が流れる。中央には干拓し整備された今富新田が広がる。しかし、現在では西側の半分が耕作放棄地となっている。



写真 3 今富新田

4. 地域住民の空間認識に関する分析

本章では 3 集落の住民が生活・生業を介して意識的に地域の範囲をどのように捉えているのか分析する。

(1) 調査・分析手法

調査では地域住民の方に地図を見せ、3 集落（西川内、志茂、大川内）の境界線を引き、範囲を示して頂いた。ヒアリング結果を元に各集落における要素をケヴィン・リンチ『都市のイメージ』をもとに各地域のイメージ構成要素であるパス、エッジ、ディストリクト、ノード、ランドマークの 5 つに分類した。また、ヒアリング調査で抽出した地域独特な地名とイメージ構成要素との関係を考察した。

(2) 地域住民の空間認識

地域住民の方々にヒアリングを行い、3 集落の境界線を引きいて頂いたところ、全ての方が同じポイントを指定し、「行政区画で昔から決まっている。」という回答が多かった。境界線を示す上でのポイントとしては片白橋、西川内三社宮、などが抽出された。また同じ山を異なる集落の人は異なる呼び方をしていること、場所に名前をつける際に迫の名前を用いていることなどがわかった。西川内の迫には昔の逸話から名前がついたものもあるようである。

5. おわりに

本研究では、今富地区の集落の成り立ちと暮らしに密着した生業を整理し、地域住民の空間認識について分析することによって、今富地区の景観構造を可視化した。

最後に調査に協力頂いた地域の方々、資料提供にご協力頂いた方々に深く感謝の意を表する。

[参考文献] 1) 天草郡河浦町役場；河浦町五十年のあゆみ、天草民報社、2004 2) 富津の文化伝承の会編集委員会；ふるさとの文化（第一集）、富津の文化伝承の会、2001 3) 社団法人 天草地区建設業協会；天草建設文化史、1978